

氏名	安部孝典
学位の専攻分野の名称	博士（芸術学）
学位記番号	甲文第168号（文部科学省への報告番号甲第575号）
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
学位授与年月日	2016年2月26日
学位論文題目	フランソワ・トリュフォー論－批評、虚構、反映画
論文審査委員	（主査）教授 加藤 哲 弘 （副査）教授 網 干 毅 豊原正智（大阪芸術大学芸術学部芸術計画学科教授）

論文内容の要旨

フランソワ・トリュフォー（François Truffaut, 1932-1984）は、ジャン＝リュック・ゴダールと並んで、1950年代末のフランスでおこった「ヌーヴェル・ヴァーグ」を代表する映画監督である。代表的な作品に、『大人は判ってくれない』（1959年）、『突然炎のごとく』（1961年）、『夜霧の恋人たち』（1968年）、『アメリカの夜』（1973年）、『終電車』（1980年）などがある。また初期の先鋭的な批評活動でも、その名はよく知られている。ちなみに映画監督としてのトリュフォーについては、批評家時代に自身が糾弾したような、旧態依然とした古典的な映画を撮るようになってしまった墮落した監督という評価がなされることが多かった。本論文の著者である安部孝典氏は、トリュフォーに対する、そのような、決まりきった評価に疑念を抱き、従来の固定的な定説には見られない新しい観点からの「作家性」を、次の三つの段階を経て、トリュフォーの批評的論考や監督作品群のなかから導き出すことを試みている。

最初の段階で氏は、トリュフォーが、不遇であった少年時代から、当時は評価の低かった一部のフランスやアメリカの監督たちに早くも注目していたことを指摘し、それが後の、「作家主義」を標榜して繰り広げられる先鋭的な批評スタイルの根底にあることを明らかにする。しかし、氏によれば、そうしたトリュフォーによる「作家主義」的精神は、しだいに過剰で強引なものへと姿を変え、最終的には、ハリウッド映画とネオレアリズモ映画という映画形式上の両極に位置する概念の間で揺られつづけるという、矛盾を含んだ志向性へと帰結する。

次の段階では、映画作家となったトリュフォーの「ドワネル」シリーズが採りあげられる。そこでは鏡や電話ボックスといった、映画的虚構性を伴う「第二のフレーム」が使用されることで、フィクションとドキュメンタリーの境界が曖昧なものにされる。しかし、この二つの対極的な概念は、シリーズの5作目『逃げ去る恋』で試みられた映像コラージュによって融合され、その結果、新たな物語が創出される。安部氏は、そこにトリュフォーの映画監督としての、まぎれもない作家性を見る。氏によれば、それは、批評家時代に見られた両極への矛盾した志向の映画的解決に他ならない。

続く第三の段階では、トリュフォー映画に見られる多様なストップ・モーションのなかでも、ショット半ばに複数回の映像の停止と再開を繰り返すものがトリュフォー独自の映像表現であることが明らかにされる。また、ゴダールのジャンプ・カットとの比較により、トリュフォーの「つまずく」ようなストップ・モーションこそが力強いリズムを生み出すものであることもここで指摘される。このリズムを生み出すストップ・モーションは、バザンのリアリズム論に従うならば「反映画的」な表現である。しかし安部氏は、ムーシナック

のリズム論を援用することによって、それが、むしろ「映画的」なものとなる可能性を秘めた表現であることを示唆する。

以上の考察から明らかにされるように、批評家時代のトリュフォーが「作家主義」によって示した先鋭的な態度は、映画監督になってからの物語叙述法や映像表現上における実験的な精神、つまり虚構と現実を融合させる手法や、「反映画的」であると同時に「映画的」でもあるストップ・モーションの手法へと、途切れることなくつながっていく。安部氏は、このことをもとに、結論として、トリュフォー映画の唯一無二の作家性とは、批評家時代から変わることなく、あらゆる二面性を融合させ新しい概念を創造する手法にあると主張する。

論文審査結果の要旨

本論文は、フランスの映画監督フランソワ・トリュフォー（François Truffaut, 1932-1984）の作家論である。よく知られているようにトリュフォーは、1950年代に始まったフランスにおける革新的な映画運動ヌーヴェル・ヴァーグを代表する人物とされている。しかしながら、これまでの研究においては、トリュフォー作品の多くは女性や子ども、あるいは自伝的な主題をもとにした古典的な物語映画のスタイルによるものであることがしばしば指摘されてきた。

安部氏は、このような、これまでの言説に対して否定的な立場をとる。その論拠として挙げられているのが、トリュフォー作品に一貫して見られる「二面性」である。この「二面性」とは、ハリウッド映画とネオレアリズモ映画、あるいはフィクションとドキュメンタリーという映画形式上の両極に位置する概念を一つの作品のなかで融合させようとするトリュフォー独自の実験的映画精神の表れであると安部氏は指摘する。この指摘には、これまで積み重ねられてきたトリュフォー研究に対する新たな解釈と新鮮な問題提起が含まれていると言ってよい。

もとより、本論の背景となる「ヌーヴェル・ヴァーグ」の枠組み自体が、いまだに曖昧な状況にあるなかで、その代表的な人物とされるトリュフォー論を展開することは、同時に「ヌーヴェル・ヴァーグ」という映画運動そのものを見直していくことにもつながる。執筆にあたって安部氏はフランスに赴き、現地の映画館やシネマテーク・フランセーズで多くの映画作品に目を通すとともに、日本では紹介されていない貴重な資料を収集して、その内容を精査することに努めた。その結果、本論文で示されたヌーヴェル・ヴァーグの概念は、その主旨となる「作家主義」という考え方とともに、具体的で、きわめて明確なかたちで説明されることになった。

また、本論文は、そのような映画史上の抽象的な概念や理論を、大胆かつ精緻な作品分析において論証した点でも大いに評価できる。第2章で展開された、トリュフォー作品のなかでも自伝的要素の強い「ドワネル」シリーズの分析では、頻繁に用いられるコラージュ映像が、引用元の作品、ショットの内容と継続時間ごとに分類され、表にまとめられた。それは安部氏が主張するトリュフォー作品の「二面性」、すなわち、物語叙述上の現実性と虚構性という両極的なものの同時共存を十分に例証するものとなっている。

さらに安部氏は、第3章で展開するストップ・モーションの分析において、トリュフォー作品の全体にわたって、それが使われているすべての箇所を抽出し、映像の停止が各ショットのどの位置に配置されているのかまでも分類した。それをもとに氏は、トリュフォーの実験的な映像描写の独自性が、一つのショットの半ばで複数回再生と停止を繰り返す技法にあると指摘する。そして、そのような特異な映像表現がもたらす効果について、バザンのリアリズム論やムーシナックのリズム論を援用しながら考察を加えることで氏は、従来の通説を覆して、トリュフォーは前衛的な映画監督であると結論づける。ヌーヴェル・ヴァーグの概念やトリュフォーの監督作品については、すでに多くの言説が積み重ねられてきた。それらに異を唱えること

は容易ではない。しかし、そのような先行研究に正面から向き合いながら、新たな知見をもたらし、映画作家論の枠をこえて映画芸術の本質論にまで言及した本論文は、映画研究の総合的な観点からみても大きな一石を投じるものであると言えよう。

なお、公開審査会では次のような問題点が指摘された。リズム論を説明する際に用いられた拍や拍節などの用語は映画学と音楽学で意味する内容が違うこと、ジャン＝リュック・ゴダール作品に用いられているジャンプ・カットとトリュフォーのストップ・モーションを類似したものにとらえることには疑問が残ること、前衛的な表現としてストップ・モーションを考察する際に古典的な映画論を援用するにはさらなる論証の精緻化が必要であることなどである。さらには、現代の映像環境においてビデオやDVDの再生と停止を繰り返すことで明らかとなったトリュフォー作品の一面と、公開当時の映画館で鑑賞された原体験としての印象の間に生じる齟齬には議論の余地が残ることも指摘された。これらは、今後の安部氏が研究者として取り組み、克服していかなければならない課題であろう。

しかしながら、これらの問題点を勘案しても、本論文は博士論文としての条件を十分に満たしている。審査委員3名は、論文の審査並びに2016年2月9日に実施した論文発表と審査会での口頭試問の結果により、安部孝典氏が博士（芸術学）の学位を受けるに値すると判断し、ここに報告する。